

2-3 ウエペケレ「ランコ カツケマツ」解説

語り手：貝澤とうるしの

解説：萱野茂

萱野：私の兄があり、兄が二人おって、なに不自由なく生活をしておる家族であった。けれども、兄たちは、どういうわけか、私の父とか母にあまりたくさん肉を持ってくるとか魚を持ってくるとか、そういうことがないので、兄も二人おる生活なんですけれども、父たちは、あまり十分楽しいとか、いい生活をしている様子はなかった。

父親が、あるときに言うには、「まあお前の兄たちを当てにするよりも、これから、ひと山越えて向こう側へ行くと、私の知り合いの人がおるから、そこへこの宝物を持って行き、そして肉とか魚とか、そうしたものと取り換えて来るように。」そう言いながら、父は宝物を出して **toma** [ござ] にくるんで、私に持たしてくれた。

私はそれを背負って、川を渡り、山を越えてずーっと来た。そしてある一か所の場所で泊まったんだな、これは？

貝澤：いや、泊まらない。火焚いておいたんだ。

萱野：そうか。途中で大きなカツラの木のあるそばで、アイヌ語で **owpoporinne** という言葉を使っておりましたが、それは、木とかそうしたものの、根からいっぱい出る、いわゆる分けつ（分蘖）の状態を **owpoporinne** というのですが、どっさり細いカツラの木の生えているそばで大きく火を焚いてちょっと休みながら私のかぶっておる被り物を、一本取って、そこであるカツラの木を、木の若木を一本スッと切って、人間の背丈ぐらいにして、それに黒い被り物をハチマキにさせて、私の言ったのは、「今こうして、父から頼まれて、アイヌ語で **siripe** と言うんですけれども、食べ物を欲しくて、この宝物を持って隣村まで行ってきます。帰りにまた寄って休みますので、どうぞひとつここで火を焚いて待っていてくださいよ。」と言いながら、その一本の木を、木を人間の高さぐらいに切り、そしてそれに、そのハチマキをさして、私は出かけて行った。

そして、行った行き先のおじいさんは非常にいい人であったので、いろいろな食べ物もおいしいものを食べさせてくれ、そして私の持って行っ

た宝物を見て、「あー、やっぱり *nispa* [裕福な人] であるから、いいものを持たせてくれたな。しかし、こういう飢饉とか、そうした時には、その代償と言いましょうか、肉をやったり、魚をやったりその代わりに宝物をもらうということは、するべきではないけれども、まあいったん受け取りましょう。」と、そういいながら、それを大切に向こうのほうへ置いたと。

そうこうしておるうちに、そこの二人の息子が山から帰ってきて、また、鹿か何かを背負ってきて、いろいろ面白い話を聞きながら、その晩はたくさんごちそう食べさせられて泊まったと。

そして次の朝には干し肉とか、干し魚とか、そうしたのをどっさり荷物にして、その荷物もできるだけ足で踏んだり、そしてがさばらないように [量が多くならないように]、小さく小さく荷造りして、その男の人たち二人が背負って、途中まで送って戻ってきてくれた。

そこへ、最初に行く途中に休んで火をたいたところまで、戻ってくると、そこで、やっぱり火が燃えておって、そこできれいな女の子が一人、娘が一人おって、私が置いたその黒いハチマキをして、言うのには「やはり、よく無事で帰ってきてくれましたね。私はあなたの言った通りに、人間になってここでお待ちしておりましたよ。」と、ニコニコ笑いながら私を迎えてくれたと。

そこで、いろいろな話をしながら、「あなたが行きながら言ったことを、私の父神、母神が聞いたので、このように人間になったんですよ。」と、言いながら、そこでいろいろと面白い話をして休み、そして、途中までその荷物をしょって [背負って] きたわけだな？

その今男の人たちが持ってきてくれた荷物を、途中から私が一人で背負ってきたのを、まあそこへきて、そのカツラの木の女神と一緒に背負って、私の父のところへ帰ってきた。

そしてその女の人は神様であったがゆえに神の国へ帰ったけれども、戻ったけれども、その時に言う事は、「今途中まで送ってくれた人の弟の方の人は非常にいい精神の人なので、必ずあなたのところに来てお嬢さんになってくれるでしょう。そしていい生活をできるでしょうから、どうぞ幸せに暮らしてくださいね」と、言いながらそのカツラの女神は帰って行った。

なるほど、何か月か過ぎてから、その弟の方の人が来て、私と一緒にあり、そしてなに不自由なく幸せに生活することができ、生活をしております。と、一人のアイヌの女の子の人が語った。

これは、*uepeker* [散文説話] です。*uepeker... aynu uepeker* [人間の散文説話] ですね。